
雪の墓標

くうーたんたん

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の墓標

【Nコード】

N9881F

【作者名】

くうーたんたん

【あらすじ】

愛する人の結婚式前日、とんでもない事件が起きた！あなたならどうしますか？

寒い…今何時だろう。ミサキはほこりだらけのジャケットから携帯を取り出した。

バッテリーの残量を示す目盛りが1つだけになった。

あつ…昨日、あのまま寝ちゃったんだった。ミサキは昨日泣き疲れてしまいそのまま携帯を充電せず放り投げておいた事を思い出した。空を見上げると穴の上の方から雪がちらちらと落ちてきて額の上に落ちては溶けて消えてゆく。圭吾、私どうしたらいいかな…？隣に横たわる圭吾の頭にはどす黒い血がこびりついていた。

早く助けを呼ばなくちゃ…いったいどうしてこんな事になっちゃったんだろう。

ミサキは二人でよく散歩したこの公園で最後に圭吾に直接会って結婚のお祝いを言い、自分の気持ちにケリを着けようと思ったのだった。こんなとこに古井戸があるなんて知らなかった…

どうやら圭吾は草に覆われたこの古井戸の蓋を踏み抜いてしまったらしかった。

ミサキは必死で圭吾の腕を掴み、引き上げようとしたが力尽きて一緒に井戸の底に落ちてしまった。どれだけの時間そうしていただろうか？先に意識を取り戻したのはミサキの方であった。月明かりで井戸の中はほんのりと白く照らされていた。「圭吾、圭吾しっかりして！」

ミサキは圭吾の身体を揺すってみたが反応は無かった。ミサキは大声で助けを呼んだ。

「誰か！誰か来て！助けてくださいーい。」必死に助けを呼んだが外からは何の返事も返ってこない。

今は夜だもの…だれもいないのね。

携帯で助けを呼ばなくちゃ…ミサキは姉の携帯番号を押したが途中で指が止まってしまった。結婚式は11時からだったわね。もしこ

のまま見つからなければいいだろうなるのかしら…私達、駆け落ちしたと思われるかもしれないわね。

そしたら…そしたらミキも諦めるかもしれない。ミサキは自慢の彼を見せたくて親友のミキに圭吾を紹介したのだった。それからほどなくして二人が付き合っているという噂を社内の先輩から聞かされたのだった。

ミキ…私に圭吾を返して！きつとこれも運命なのよ。その時、バツテリー切れをしらせる音が

「ピーッ」と鳴った。

これでもう外界とを繋ぐものはなくなってしまった。二人は身を寄せあつて夜が明けるのを待った。

「ミキ、忘れ物はない？」ミキの母は結婚式の準備のため、家族より一足早く式場に向かう娘に声をかけた。

「大丈夫よ。心配なし！花嫁は大変よね。こんなに朝早くから支度にかからなくちゃならないなんて。圭吾は楽でいいわ、今頃きつとまだ夢の中よ。」「さあ、早く行きなさい。圭吾さんにとびきり綺麗な花嫁姿見せてあげなくちゃね。」

ミキの母はそう言つて娘を送り出した。その頃、井戸の底で二人は降り注ぐ朝日に照らされて結婚式の日をむかえた。

明るくなってわかったが、圭吾の傷は深いらしく腕はありえない方向に曲がり血も頭だけでなくあちこちから流れているようであった。圭吾…このままじゃ死んじゃうわ！

とにかく助けを呼ばなくちゃ。ミサキは声が哽れるまで叫び続けた。日が西に傾き、とうとうまた暗闇に包まれてしまった。

ミキ…どうしているかしら？

そのころミキはとうとう式場に現れなかった圭吾の行方を探していた。

まさかとは思つたがミサキの家にも行つてみた。

「実はミサキも昨日から帰っていないんですよ。いったいどこにいったのか…」

ミサキの家は母親とミサキの二人暮らしだ。父親はミサキが子供の頃、病気で亡くなったと聞いている。

「もしかして…二人で駆け落ちしたとか？」ミサキは青ざめた顔でそう言うのにミサキの母はキッパリと

「あの子はそんな事をする子ではありませんよ！」と言って、とにかく警察に届けでる事にした。その頃ミサキは意識を失ったままの圭吾の髪を撫でながら、二人が恋人であつた頃の思い出に耽っていた。

ミサキの薬指にはまっているピンクトルマリンの細い指輪を外し、圭吾の小指にはめた。圭吾…これ返すわね。愛してくれてありがとう。

空が白く明るく見える。

雪がハラハラと二人の上に落ちてきた。

ミサキは圭吾の上に覆い被さり目を閉じた。圭吾…暖かい。あなたのぬくもり忘れないわ…。

「おい！返事をしてくれ！聞こえるか？」天井から懐中電灯の明かりが眩しく差し込んできた。

「ここです！助けて下さい！」

「救急車を呼べ、人がいるぞ！」

井戸の底で救助の男が見たものは真っ白い雪を被り重なり合った二人の姿であつた。

「圭吾、支度は出来たのか？」今日は結婚式で友人代表の挨拶を頼まれている大輔は圭吾の少しやつれている顔を心配して声をかけた。「ああバツチリ！どうだ。俺ほどタキシードが似合う男もそうはいないだろ？」

大輔は呆れ顔で

「バーカ！さあ、行くぞ。」圭吾は教会の牧師の前で佇み、花嫁の入場を待った。

扉が開き、花嫁が入場した。その顔は幸せに輝いている。

圭吾は花嫁の手をとった。右手の薬指にはピンクトルマリンの指輪

がはまっている。今日は左の薬指に結婚指輪がおさまるはずだ。

「俺達、幸せになろう…。ミサキの分まで。」ミキは静かにうなずいた。

「ミサキはあなたを命懸けで守りました。どうかあの子の分まで幸せになって下さい。」

圭吾はミサキの母に涙ながらにお詫びをしたが、ミサキの母は気丈であつた。

二人は式の後ミサキの墓に向かった。

「ミサキ、これは返すわ、あなたの物よ。」ミキは墓の横に植わっているアイスバーグの根元を掘り、ピンクトルマリンの指輪を埋めた。

毎年、白い花を咲かせるアイスバーグはなぜかピンク色の花を咲かせるようになったという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9881f/>

雪の墓標

2010年10月11日12時33分発行